

新聞記事における図書館の語られ方

中 林 幸 子

要旨：本研究では、非来館者が図書館に抱くイメージの一助となるものとして、また図書館員にとっては来館者・非来館者を問わず広く図書館の広報活動を行うことのできる場として存在する、新聞記事に着目した。「新聞記事は図書館をどのように語っているのか」を明らかにすることを目的として、新聞記事1件ずつに対して、①館種による分類、②地域による分類、③『日本十進分類法』新訂10版の010番台に基づいた主題分析という、3種の分類を行った。調査対象は2015年1月1日から2019年12月31日までの5年間の河北新報データベースに掲載されている新聞記事のうち、「図書館」を見出しに含む記事である。その結果、図書館に関する記事は年間約135件掲載されており、そのうちの多くが多賀城市立図書館本館をはじめとする公立図書館を扱った記事であること、専門図書館と点字図書館、電子図書館は新聞の配付地域内に設置されているにもかかわらず、これを扱った記事が少ないこと、講演会などの集会活動を報じるといった図書館サービスに関する記事が多いこと、図書館側は「本と人、人と人がつながる場所」として図書館を語っているが、利用者側はつながる場所としてよりも「本がたくさんあり、静かで集中できる場所」として図書館を語っていることなどが分かった。

キーワード：図書館 新聞記事 主題分析

1. は じ め に

人々が図書館に抱くイメージは、「静かな場所」、「うるさくしたら怒られる場所」、「本を読みに行く場所」といったものであることが多い。近年はカフェを併設する公立図書館や、公立図書館や商業施設、社会教育施設が入る自治体の複合施設が建設されるなどし、「静かな場所」というイメージから脱却し、利用者の情報要求を満たすという本来の目的を、様々な角度から果たそうとする図書館が増えている。たとえば2015年9月8日、福島民友新聞社が発行する『福島民友』に「変わる図書館イメージ」との見出しで、図書館の施設の特徴やサービスを紹介する記事が掲載された。この記事では、人々がつながる場所として図書館があると説明されている。それから5年が経過した現在、「変わる図書館」は依然増加傾向にある。東北に限定してみても、ショッピングモール内に開館したつがる市立図書館（2016年開館）や、書店やカフェを併設した多賀城市立図書館本館（2016年開館）、カフェも備える観光交流センター内に開館した久慈市立図書館（2020年開館）などが具体例として挙げられる。しかし、現在でも図書館の利用する人々のほうは、旧来からの「静かな場所」「真面目な場所」とのイメージが払拭できずにいるようである。

図書館を利用したことのある人にとっては、イメージする図書館像のもととなるのは、実際に行ったことのある図書館の様子や、他人やメディアから得る図書館についての情報である。しか

し図書館を訪れたことのない、あるいは久しく訪れていない者がイメージする図書館像は、他人やメディアから得られる図書館についての情報によって形成される。つまり、メディアの中で描かれる図書館は、日々図書館を利用する人にとっても、図書館を訪れたことのない非来館者にとっても、図書館のイメージのもととなる。

一方、図書館側の視点で見ると、新聞記事は広報活動を行う場の一つである。地域の新聞社に「この点を取材してほしい」と働きかけることが（実際掲載されるかどうかは別としても）可能なためである。ただ、新聞紙の購読者数は減少し、今や読者層は限られる。日本新聞協会によると、新聞の発行部数は毎年減少しており、2019年10月時点で4,623万3,000部、人口1,000人あたり370部である¹⁾。1世帯あたりの部数も0.66部となっている²⁾。しかし、新聞社のウェブサイトやニュースサイトを通してのニュース記事閲覧などもあり、新聞記事の分析研究は有用であると考えられる。また、インターネットが普及した現在では、図書館の広報活動の場はオンラインにも多くある。しかしインターネットメディアの多くは、人々が検索するなどしてたどり着かない限り、目に触れる機会がないプル型である。図書館に興味を持つ者は、プル型の広報つまり図書館について書かれたウェブページを目にする機会も多いだろう。しかし、そうでない者の目に図書館について書かれたウェブページがとまる可能性は低い。

そのため本研究では、図書館の興味の有無にかかわらず閲覧する機会がある新聞記事に着目して、図書館を主題にした記事の語られ方を調査し、記事中の情報の傾向を明らかにする。これにより、新聞記事を見た人々は図書館にどのようなイメージを抱くのか、図書館運営者は図書館にどんなイメージを持たせたいのかを考察する。

2. 関 連 研 究

2.1 新聞以外のメディアで描かれる図書館についての研究

メディアの中で図書館がどのように語られているのかを研究したものについて述べる。

まず、マンガを対象とした研究がある。山口は主に1990年代以降のマンガを対象とし、そこに描かれる図書館員の姿を分析している³⁻⁷⁾。山口の研究では、現実の図書館員は図書館の自由に関する宣言や綱領に基づいて利用者の秘密を守っているが、マンガでは利用者の秘密を守らずに情報漏洩を行う図書館員がおり、「古くは1980年代初めから、2001年の作品まで、繰り返し描かれ続けている」⁴⁾ (p. 57) ことを指摘している。また、「騒がしい利用者を冷徹に注意し、図書館内の静寂を必死になって守るだけの『図書室の管理人』としてのイメージが強くなる」⁵⁾ (p. 1) として、マンガには図書館の機能や図書館員の専門性が考慮されておらず、「そうした物語を受け入れ、成立させている多くの読者もまた、図書館に対して正しいイメージを持っているとは考えにくい」⁵⁾ (p. 1) と指摘している。

市村(1992)は、映像メディアの中でも映画作品に絞り、図書館と図書館員がどう描かれてい

るかの分析を行っている。その結果、「洋画では調査研究の場として図書館が描かれる割合がもっとも高いが、邦画ではそのような作品の割合は少ない」⁸⁾ (p. 34) とし、「これを単に作り手の意識の問題としてとらえるべきでなく、見る人を含めた社会全体が抱くイメージの問題として、また、図書館と社会全体との関わり方の問題として、考えることが重要ではないだろうか」⁸⁾ (pp. 34-35) と問題提起を行っている。

仁上 (2005) はテレビドラマに描かれる図書館員を分析し、「(1) 性格は地味、控えめ、人見知り、融通が利かない、(2) サービス精神と専門職業意識が低い、(3) 仕事は受付、貸出返却、返本などの定型業務ばかり、(4) 司書資格は他の資格より簡単に取得できる、など」⁹⁾ (pp. 311-312) が図書館員像のマイナスなステレオタイプであると述べる。また、このマイナスイメージを払拭して新しいイメージを利用者に印象づけるには、広報戦略やイメージ戦略を持つべきであると結論づける。

佐藤 (2012) は東日本大震災の年や図書館法改正の年といった特定の一年間に着目し、その一年間で発表された映像メディア、テレビドラマ、コミック、小説、エッセイの中で図書館が登場する作品を取り上げる。そしてそれらの中で図書館がどのように扱われているのか、分析を行っている^{10,11)}。

以上、本節で言及した研究は、メディアの中でもフィクションの作品を研究対象としたものである。世間が抱く図書館のイメージが変わる、もしくは図書館関係者が監修などで関わるなどしない限り、これらのメディアで描かれる図書館や図書館員を、実際の図書館・図書館員に近づけることは難しい。このため本研究では、ノンフィクションを扱い、図書館員をはじめとする図書館関係者の声を掲載することができるメディアである、新聞記事に着目する。

2.2 人々が図書館に抱くイメージの研究

長谷川 (2014) は、図書館情報学をコースとして選択している大学生と公共図書館の利用者に、公共図書館と書店に対して抱くイメージを調査し、人々が図書館に対してどのようなイメージを抱いているかを研究した¹²⁾。大学生は書店のほうに「あたらしい」「きがるな」「おしゃれな」などのややポジティブなイメージを持っていると分析している。また、図書館にはかなり「しずかな」イメージを持っていると指摘している。一方、公共図書館の利用者は、書店に対するイメージと公共図書館に対するイメージにあまり差がなく、全体的にポジティブなイメージを抱いていると考察している。来館者と非来館者では、図書館に抱くイメージが異なることがうかがえる。

2.3 新聞記事の中で図書館がどう語られているかについての研究

村井 (1987) は、図書館資料としてクリッピング (切り抜き) される新聞記事に着目し、クリッピングされた図書館に関する新聞記事がどんな主題を持つかを、日本十進分類法を用いて分析し

た¹³⁾。その結果、「図書の整理と保管」についての記事が多いと述べている。村井の研究は新聞記事中の図書館の語られ方について扱ったものではあるが、その主題は図書館資料として新聞記事を収集し整理することであり、新聞記事の中で取り上げられる図書館の傾向などへの言及は少ない。またそのためか、新聞記事の収集期間や記事総数も明らかにされていない。

林（2013）は日本経済新聞と朝日新聞それぞれの新聞記事データベースから、見出しに「図書館」を含む1985年から2012年までの記事を抽出した。それらを3つの期間に分け、まず村井の研究手法を踏襲して日本十進分類法を用いた主題分析を行った。次にテキストマイニングを使用した内容分析を行い、記事の経年変化を分析した¹⁴⁾。内容分析では、雑誌『図書館』も取り上げ、新聞記事と雑誌の語の傾向を比較している。その結果、国立国会図書館に関する記事が減少傾向にあり、反対に公立図書館に関する記事が増加傾向であること、朝日新聞と日本経済新聞では、頻出語に違いが現れたことを挙げている。27年間の長期にわたる経年変化を分析しているが、新聞記事は月ごとに1記事ずつ抽出しており、期間中全ての図書館を主題とした記事を調査対象としているわけではない。

小田（2013）は1990年代以降の約20年間の『西日本新聞』を対象に、九州地区における図書館サービスを扱った1,107記事を調査した¹⁵⁾。そして、利用者や非来館者といった図書館職員以外の人の目には、図書館にはどのようなサービスがあると映るのかを考察した。その結果、サービスタイプ別では、集会、展示、読書推進といった文化活動を取り上げる記事が約半数を占めた。サービスタイプ別で利用者対象別サービスに分類された記事をさらに利用対象者で分類した結果、児童を対象とするサービスが74.6%あった。児童を対象とするサービスの件数は多いものの、その多くは読書指導であり、「読書教育や学習支援は、ほとんどなされていなかった」と結論づけている¹⁵⁾（p.8）。

本研究では、新聞記事は人々の図書館に対するイメージの元となる情報であるとして、これを研究対象とする。そのため、図書館サービスに限定せず、広く図書館について語られた記事を収集する。これを村井と林が行った調査方法、つまり図書館を主題にした新聞記事を日本十進分類法に基づいて主題分析を行う。それらの研究と結果の比較を行いつつ、さらに調査対象を東北地方の地方紙に限定することで、地方紙の特性も探る。

3. 方 法

3.1 調査対象

新聞記事データベース「河北新報データベース」に収録された、『河北新報』などの記事を調査対象とする。『河北新報』は、宮城県内のニュースを中心に取り扱いつつも、東北全域が配付対象の「ブロック紙」にカテゴライズされることもある地方紙である。東北地方の情報も広く網羅しているため選択した。河北新報データベースに収録されている新聞記事のうち、2015年1

月 1 日から 2019 年 12 月 31 日までの 5 年間に「図書館」を見出しに含む記事を抽出した。結果、表 1 の検索条件で 722 件がヒットした¹⁶⁾。

表 1 河北新報データベースでの検索条件

条 件	設 定
検索語	図書館
期間	20150101～20191231
検索方式	すべての語を含む
一致方式	完全一致
検索範囲	見出し
同義語展開	しない
シソーラス展開	しない
媒体	河北新報、石巻かほく、こども新聞

このうちの全てに目を通し、図書館に関する記事ではないものを除外した。図書館に関する記事ではないと判断する観点は、次の 4 点である。この除外の観点は林（2013）のものを参考にしつつ、改変した。

- ・書名、通りの名称などに「図書館」を含み、内容は図書館と関係ない記事

例：「『図書館戦争』特集／キネマ増刊贈呈／三陸河北新報社は、キネマ旬報社発行の「キネマ旬報増刊 キネマ旬報 NEXT Vol. 9 『図書館戦争 THE LAST MISSION』」を 2 人に読者プレゼントする。／」『石巻かほく』、2015 年 10 月 31 日

- ・図書館に関する人が取材対象となり、内容は図書館と関係ない記事

例：「気軽にトーク／今、食べたいもの／イチジク甘煮 秋の味／大学図書館司書 安藤美保（あんどう・みほ）さん（49）仙台市泉区／今の時季に食べたいものは甘く煮たイチジクです。自宅の庭にイチジクの木があり毎年、」『河北新報』夕刊 1 ページ、2018 年 11 月 2 日

- ・図書館がたとえに使われている記事

例：「微風旋風／美術館のあるまち 武政文彦／わがまちには萬鉄五郎記念美術館がある。図書館や公共ホールのないまちというのは珍しいが、美術館はどうだろう。公立美術館のある市は全国で 3 割弱という調査結果がある。町」『河北新報』朝刊、2016 年 02 月 18 日

- ・図書館について言及していない記事

例：「人事／◇青森県教委（4 月 1 日）県立図書館長（県立郷土館長）山田勝規／（31 日）退職 県立図書館長佐藤宰／◇岩手県（4 月 1 日）技監（国土交通省）中平善伸／（31 日）辞職 県土整備部長中野稔治＝国土交通省」『河北新報』朝刊 24 ページ、2018 年 3 月 24 日

この結果 722 件中 47 件が除外されたため、最終的に調査の対象となったのは 675 件の新聞記事である。

3.2 調査方法

3.1 で抽出された 675 件の記事の、年代ごとの内訳は表 2 の通りである。2015 年は 105 件と他の年に比べて少ないが、2016 年から 2019 年までは大きな記事数の増減はない。平均して、1 年に 135 件の記事が掲載されている。年間 365 日と考えると、およそ 2 日から 4 日に 1 回は、図書館に関する何らかの記事が新聞に掲載されている計算となる。これらを、取り上げている図書館の館種と地域、主題分析の 3 種の方法で分類した。

表 2 新聞記事の経年変化

年	件 数
2015	105
2016	134
2017	141
2018	154
2019	141
計	675

3.2.1 館種

林（2013）は館種を国会、公立、学校、大学、専門、子ども、点字、電子、外国、図書館一般、その他の 11 種類に分類した。林の分類では、「図書館一般」は「記事の内容は特にどの図書館ではなく、図書館が対象とした記事」が該当し、「その他」は記念図書館や私設図書館が該当する。林の結果と比較を行うため、本研究ではこの 11 種で分類を行った。

なお、読者投書記事に見られる、執筆者は特定の図書館を想定して書いているものの、記事中からは館種が読み取れないものは、「図書館一般」に収めた。

3.2.2 地域

記事で取り上げられている図書館の所在地を、青森、秋田、岩手、宮城、山形、福島 の 6 県に分類した。さらに、東北地方の複数の県の図書館を対象とした記事を「東北一般」に、東京都の図書館など国内の他地方の図書館を対象とした記事を「国内」に、外国の図書館を扱った記事を「外国」に分類した¹⁷⁾。国内外の図書館を同時に扱った記事や、地域の特定ができない図書館を扱った記事は「その他」に分類した。結果、10 種類の分類を行った。

3.2.3 主題分析

2.3 で述べたように、村井（1987）はクリッピングした新聞記事を日本十進分類法の 010 番台で分類している。村井による 010 番台の分類は、下記の 10 種類である。

- ・ 010 図書館
- ・ 011 図書館政策および財政
- ・ 012 図書館建築と設備
- ・ 013 図書館管理
- ・ 014 図書の整理と保管
- ・ 015 図書運用法・図書館活動
- ・ 016 一般図書館
- ・ 017 学校図書館・大学図書館
- ・ 018 専門図書館
- ・ 019 図書利用法・読書法

論文中には言及されていないが、村井の研究が発表されたのが1987年であるため、これは『日本十進分類法』新訂8版に基づく分類であると推測される。

林(2013)は主題をまず011, 012, 013, 014, 015, 019のいずれかに分類し、これとは別に016, 017, 018の3種類で館種を分類している¹⁸⁾。林による010番台の分類は、下記の9種類である。

- ・ 011 図書館政策. 図書館行財政
- ・ 012 図書館建築. 図書館設備
- ・ 013 図書館管理
- ・ 014 資料の収集. 資料の整理. 資料の保管
- ・ 015 図書館奉仕. 図書館活動
- ・ 016 各種の図書館
- ・ 017 学校図書館
- ・ 018 専門図書館
- ・ 019 読書・読書法

これも論文中には言及されていないが、林の研究は2014年3月までに行われたものであるため、『日本十進分類法』新訂9版に基づく分類であると推測される¹⁹⁾。

本研究では林の二段階の分類方法に倣ったが、010番台の分類は、『日本十進分類法』の最新版である新訂10版の分類に従った。すなわち、一段階目は下記の6種類の分類を行った。

- ・ 011 図書館政策. 図書館行財政
- ・ 012 図書館建築. 図書館設備
- ・ 013 図書館経営・管理
- ・ 014 情報資源の収集・組織化・保存
- ・ 015 図書館サービス. 図書館活動
- ・ 019 読書・読書法

二段階目は下記の3種類の分類を行った²⁰⁾。

- ・016 各種の図書館
- ・017 学校図書館
- ・018 専門図書館

文言の多少の違いはあるが、旧版で付与された記号が全く別の記号に置き変わるというような大きな変化はないため、上記の調査方法で得られた結果と村井や林の研究結果とを比較することは可能だと考えられる。

4. 結果と考察

4.1 館種

675件の図書館に関する新聞記事の、館種別の割合は表3の通りである。

表3 館種による分類

館 種	件 数	割合 (%)
国立国会図書館	6	0.9
公立図書館	535	79.2
学校図書館	18	2.7
大学図書館	33	4.9
専門図書館	2	0.3
子ども図書館	3	0.4
点字図書館	0	0
電子図書館	0	0
外国図書館	10	1.5
図書館一般	36	5.3
その他の図書館	32	4.7
計	675	100

割合は小数点第2位を四捨五入した。

館種が特定できる記事のうち、最も多く取り上げられていたのは公立図書館であった。次いで大学図書館、学校図書館となる。角田宇宙センター図書室（宮城県）や北上川歴史図書館（岩手県）など専門図書館は東北地方にも存在するが、東北地方にはない国立国会図書館を取り上げた記事の数よりも、専門図書館を取り上げた記事は2件と少なかった。2件のうち1件は、東京都千代田区にある海事図書館を紹介しながら専門図書館の存在をアピールする内容の、東京都三鷹市在住の読者による投書記事であった（2019年8月24日河北新報朝刊7ページ）。もう1件は東京都千代田区にある大宅壮一文庫の財政難を報じる記事であった（2019年9月18日河北新報朝刊11ページ）。つまり、専門図書館を扱った記事はいずれも東北地方の専門図書館について書

かれたものではなかった。点字図書館は東北各県に一館以上設置されているが、点字図書館を取り上げた記事はなかった。電子図書館サービスを実施する図書館は、郡山市図書館、おいらせ町立図書館、やはばーく（矢巾町図書センター）、各大学の大学図書館などがあるが、電子図書館を取り上げた記事もなかった。専門図書館、点字図書館、電子図書館ともに、公立図書館とは異なり、利用者層は限られる。図書館側が新聞で広く広報する必要はないと考えて新聞社に記事掲載の働きかけをしていないという解釈もできる。しかし記事がないことから、新聞を見た人々はこれらの図書館に対するイメージを形成する材料を得られない。専門図書館、点字図書館、電子図書館の存在を知らない人々も多くいるのではと考えられる。

林（2013）が行った朝日新聞、日本経済新聞の新聞記事の館種別の分類は表4である。林は割合を示していなかったため、表に加筆した。

表4 両新聞の記事の館種による分類結果の比較

館 種	朝日新聞の件数 (割合 %)	日本経済新聞の件数 (割合 %)
国立国会図書館	41 (12.5)	68 (20.5)
公立図書館	216 (65.9)	157 (47.4)
学校図書館	8 (2.4)	4 (1.2)
大学図書館	16 (4.9)	27 (8.2)
専門図書館	20 (6.1)	25 (7.6)
子ども図書館	5 (1.5)	6 (1.8)
点字図書館	4 (1.2)	3 (0.9)
電子図書館	2 (0.6)	6 (1.8)
外国図書館	8 (2.4)	14 (4.2)
図書館一般	4 (1.2)	16 (4.8)
その他の図書館	4 (1.2)	5 (1.5)
計	328 (100)	331 (100)

林（2013）を修正。

割合は小数点第2位を四捨五入した。

比較すると、国立国会図書館の記事数が大きく異なる。国立国会図書館の記事は朝日新聞、日本経済新聞では割合が高く、河北新報では低い。反対に、公立図書館の記事の割合は、河北新報では高く、朝日新聞と日本経済新聞では低い。これは、朝日新聞と日本経済新聞が全国紙、河北新報が地方紙という新聞の特徴の違いによると思われる。公立図書館は図書館の館種の中で最も人々に密接した図書館である。公立図書館は地域に密着する地方紙と親和性が高いと考えられる。

4.2 地域

675 件の図書館に関する新聞記事の、地域別の割合は表5の通りである。

表5 地域による分類

地 域	件 数	割合 (%)
東北地方	577	85.5
(青森)	(8)	(1.2)
(秋田)	(22)	(3.3)
(岩手)	(35)	(5.2)
(山形)	(10)	(1.5)
(宮城)	(480)	(71.1)
(福島)	(18)	(2.7)
(東北一般)	(4)	(0.6)
国 内	78	11.6
外 国	10	1.5
その他	10	1.5
計	675	100

割合は小数点第2位を四捨五入した。

河北新報データベースは、宮城県内のニュースを主に取り扱い、また発行部数も宮城県が最も多い。そのため、宮城県内の図書館を扱った記事が突出して多いと考えられる。しかし、同じ宮城県内の図書館でも、取り上げられる回数には差が見られた。たとえば、2016年に開館した多賀城市立図書館本館に関する記事は、開館前に指定管理者制度を導入していると伝える記事や、開館当日の模様を伝える記事、開館して1ヶ月後の様子を報じる記事、前館長の給与をめぐる住民の監査請求が行われたことを報じる記事といったものを含めて、69件あった。宮城県内の図書館に関する記事が480件であるため、このうちの1割以上が多賀城市立図書館本館の話題であったことを意味する。

なお、記事の収集期間である2015年1月1日から2019年12月31日までに、新規・移転開館が報じられた図書館とその記事件数は、「川の上 百俵館」3件、多賀城市立図書館本館69件、「やはぱーく」(矢巾町図書センターを含む複合施設)1件、「ナセBA」(市立米沢図書館を含む複合施設)1件、つがる市立図書館2件、「まなびあテラス」(東根市図書館を含む複合施設)1件、「ビッグルーフ滝沢」(滝沢市立湖山図書館を含む複合施設)1件、「Book & Cafe こ・らっしえ」2件、大崎市図書館24件、陸前高田市立図書館5件、気仙沼図書館1件、「みんなのとしょかん」3件、「展勝地文庫」1件、「tette (てって)」1件、名取市図書館15件の15館であった。このことから、新規に開館する図書館が新聞に多く掲載されるわけではなく、多賀城市立図書館本館の記事数が非常に多いことが分かる。

4.3 日本十進分類法による主題分析

675件の図書館に関する新聞記事を、日本十進分類法で主題別に分類した結果は表6の通りで

ある。

表 6 日本十進分類法による主題分析 1

分 類	件 数	割合 (%)
011 図書館政策、図書館行財政	100	14.8
012 図書館建築、図書館設備	22	3.3
013 図書館経営・管理	62	9.2
014 情報資源の収集・組織化・保存	58	8.6
015 図書館サービス、図書館活動	400	59.2
019 読書・読書法	33	4.9
計	675	100

割合は小数点第 2 位を四捨五入した。

「015 図書館サービス、図書館活動」についての記事が最も多い結果となった。015 には、講演会や「図書館まつり」といったイベントの案内および実施報告などの、文化活動が分類される。イベントは時期を絞って行われるため、他の図書館業務と比較してニュースバリューが高いと考えられる。

「011 図書館政策、図書館行財政」には、図書館設置を目指す富谷市による、各種検討の報告などが分類された。011 に分類した記事や、015 に分類した図書館の新規開館を扱った記事、新しいイベントを伝える記事の文面には、図書館の設置母体の関係者、図書館の館長や職員のコメントとして、旧来の図書館のイメージを払拭しようとする意図が読み取れるものがあった。石巻市議会で新図書館が議題に上がったことを報告する記事では、市教育委員会の「全国的な方向性として図書の貸し出し中心の運営から滞在型へ変化している」(2019 年 9 月 19 日石巻かほく 1 ページ)というコメントが掲載されたほか、紫波町図書館でのイベント「夜のとしょかん」の開催を報告する記事での「図書館は本を借りるだけの場所ではないことを知ってほしい」という館長のコメント (2018 年 6 月 8 日河北新報朝刊 24 ページ)、仙台市民図書館で「書籍を借りて読むだけではない図書館との関わり方を知ってもらう企画」が開催されていることを知らせる記事 (2016 年 7 月 17 日河北新報朝刊)、学校図書館関係者の研修会が開催されたことを知らせる記事中での「学校図書館は長い間、本を所蔵する場所という認識だったが“学習センター”としての機能も併せ持つ」という文面 (2017 年 11 月 22 日石巻かほく 3 ページ) などがあった。さらに踏み込んで、図書館が人との交流の場になることを期待する発言も複数見られた。たとえば、福島県の富岡町図書館再開式での町長による「町民の交流の場になってほしい」というコメント (2018 年 4 月 2 日河北新報朝刊 24 ページ) や、石巻市の移動図書館「ひより号」に対する館長の「単に本を貸すだけでなく、本を通じた交流、触れ合いを大事にしたい」というコメント (2015 年 1 月 31 日石巻かほく)、秋田県秋田市に設置されている私設図書館「文庫 HonCo」の代表者による「本と人がつながる場をつくりたい」というコメント (2016 年 9 月 4 日河北新報朝刊)、

開館を目指す富谷市民図書館の運営方針が話し合われた会議での「コミュニティづくりの場にもしたい」「本や人との出会いの場として心地よく過ごせる空間になるよう」という参加者や教育長の声である（2019年2月18日河北新報朝刊15ページ）。ほか、015に分類した記事中では、「近年は、再開発や新しい町づくりで中核を担う交流拠点とするケースが目立つ」（2018年10月20日河北新報朝刊21ページ）という有識者のコメントが掲載されていた。

しかし、記事内で利用者に取材した声や投書記事内の読者の声では、図書館の設置母体の関係者、図書館の館長や職員といった図書館側の人々が語る「新しい図書館」よりも、各種の図書館を「読書や勉強を静かに行う場」とみなしたのが見られた。たとえば、「勉強に通いたい（2018年4月1日河北新報朝刊15ページ）」、「まじめに勉強する受験生に交じって机に向かうと『負けられない』という気持ちになり集中できます（2015年5月13日河北新報夕刊1ページ）」、「多くの人がおりながら、ページをめくる音ぐらいしかない独特の静寂さが好きでたまらない（2016年5月4日河北新報朝刊）」というものである。「所蔵書物が純文学や名作など、学習系中心」である「学校図書室の敷居の高さ」は、「読書が若者の間で普及しているとは言い難い」ことの原因のひとつだと語る新聞読者もいた（2015年7月23日河北新報朝刊）。以上のことから、図書館側の人々による図書館に対する思いと利用者による図書館に対する思いは、新聞記事上ではズレが生じていることが分かった。

675件の図書館に関する新聞記事を、日本十進分類法で館種別に分類した結果は表7の通りである。

表7 日本十進分類法による主題分析2

分 類	件 数	割合 (%)
016 各種の図書館	622	92.1
017 学校図書館	51	7.6
018 専門図書館	2	0.3
計	675	100

割合は小数点第2位を四捨五入した。

表7は4.1でみた館種の分類と重なるが、これは先行研究との比較を行うために実施した。よって以下、村井（1987）と林（2014）の結果と比較を行う。村井による日本十進分類法での主題分析は表8に、林による日本十進分類法での主題分析は表9に示す。

村井は、分類した新聞記事の数を明かさず、割合で示している。林は、朝日新聞と日本経済新聞それぞれの分類結果について、割合ではなく記事の件数で表している。したがって表9では、林が論文中で示した表に割合を加えた。林と本研究は、011、012、013、014、015、019の分類と、016、017、018の分類を分けているが、村井は同時に分類している。そのために3つの結果の単純な比較はできない。

表 8 村井による日本十進分類法での主題分析

分 類	割合 (%)
010 図書館	3
011 図書館政策および財政	9
012 図書館建築と設備	6
013 図書館管理	6
014 図書の整理と保管	19
015 図書運用法・図書館活動	15
016 一般図書館	13
017 学校図書館・大学図書館	11
018 専門図書館	6
019 読書・読書法	12
計	100

村井（1987）を修正。

表 9 林による日本十進分類法での主題分析

分 類	朝日新聞（割合）	日本経済新聞（割合）
011 図書館政策. 図書館行財政	79 (24.1)	80 (24.2)
012 図書館建築. 図書館設備	29 (8.8)	52 (15.7)
013 図書館管理	58 (17.7)	63 (19.0)
014 資料の収集. 資料の整理. 資料の保管	35 (10.1)	44 (13.3)
015 図書館奉仕. 図書館活動	127 (38.7)	91 (27.5)
016 各種の図書館	284 (86.6)	275 (83.1)
017 学校図書館	24 (7.3)	31 (9.4)
018 専門図書館	20 (6.1)	25 (7.6)
019 読書・読書法	0 (0)	1 (0.3)

林（2013）を修正。

割合は小数点第 2 位を四捨五入した。

村井の分類結果が、いずれの分類も際立って多い項目がない理由には、新聞記事全てを分類したのではなく、図書館資料としてクリッピングし終えた記事を分類したためだと考えられる²¹⁾。村井と比較して、林と本研究では 016 と 015 の割合が高い。これは、新聞記事全体を調査対象としたためであると考えられる。

林の研究では 019 の割合が少ないが、本研究では 019 に分類された新聞記事が 4.9% あった。これは調査年の違いではなく、地方紙と全国紙という特性、または林の調査方法と本研究の調査方法が異なるためと考えられる。本研究では、019 に分類された記事 33 件のうち、11 件が図書館員による書評であった。たとえば次の記事である。

・「週刊かほピョンこども新聞／この夏 図書館で本と出合おう(上)／もうすぐ夏休みですね。

この夏は近くの図書館に行って、心に残る一冊（さつ）と出合ってみませんか。宮城県内にある四つの公立図書館を紹介するとと」『河北新報』朝刊 2 ページ、2016 年 7 月 17 日

- ・「読書の秋の勧め 石巻市図書館司書が案内(1) / クリス・ハドフィールド作「くらやみのなかのゆめ」 / 夢持つ大切さ伝える伝記 / 読書の秋。過ごしやすい季節がやってきた。子どもたちにとっても素敵(すてき)な絵本」『石巻かほく』2ページ, 2017年10月3日

林の研究では、新聞記事データベースで「図書館」を見出しに含む記事全てが主題分析の調査対象になったわけではない。1990年1月、1990年2月、1990年3月といったように、年月ごとに検索し、その月の検索結果で適合度が一位になった記事を調査対象としている。そのため、本研究で019に分類された上記のような書評記事は、林の研究では対象から抜け落ちたと考えられる。

河北新報データベースに掲載されていた書評記事の多くは、宮城県内の公立図書館の図書館員によって執筆されていた。地方紙ならではの地域に密着した記事であり、図書館の存在と所蔵資料をアピールすることで来館を促す、公立図書館の広報活動の成果物であると言える。

5. おわりに 結論

5.1 まとめ

本研究では、新聞記事における図書館の語られ方を明らかにすることを目的とし、河北新報データベースに掲載された2015年1月1日から2019年12月31日までの新聞記事のうち、「図書館」を見出しに含む記事675件を調査対象として、館種による分類と地域による分類、そして日本十進分類法による主題分析を行った。その結果、次のことが明らかになった。

図書館に関する記事は年間約135件掲載されている。およそ3日に1回のペースで記事が掲載されることから、新聞を図書館の広報活動の場と考ええると、図書館が人々の身近に存在することをアピールできていると言える。図書館に関する記事のうち79.2%が公立図書館の記事である。次いで複数の館種を扱った記事(5.3%)、大学図書館を扱った記事(4.9%)が多いが、専門図書館に関する記事は0.3%と少数であった。また、電子図書館や点字図書館に関する記事は期間中には掲載されていなかった。地域の公立図書館は河北新報データベースでの広報活動に成功しているが、その他の館種の図書館はこの期間の広報活動があまりできていないと言える。

地域で分類した結果、東北地方の図書館に関する記事が85.5%、宮城県内の図書館に関する記事が71.1%あった。その中でも多賀城市立図書館に関する記事が多かったことから、記事の内容はともかく、人々に図書館の存在を認知させるという意味では、多賀城市立図書館は他の図書館に比べて広報活動に成功していた。

主題で分類した結果、講演会などの集会活動を報じるなどの「015 図書館サービス、図書館活動」の記事が59.2%、開館準備に伴う施策を報じるなどの「011 図書館政策、図書館行財政」が14.8%あった。011や015に分類した記事中では、近年の図書館は地域の交流の場であると語られることがあったが、利用者に取材した声では、読書や学習の場として活用していることや、

図書館の静けさを好んでいることなど、旧来の図書館のイメージを持つ者も見られた。また、全国紙を扱った先行研究では「019 読書・読書法」に記事は分類されなかったが、地方紙を扱った本研究では 019 に分類された記事があった。調査方法が多少異なるため断言はできないが、この記事の多くは公立図書館の図書館員による書評記事であったことから、地方紙では図書館員による書評が図書館の広報となり得ることが分かった。

主に公立図書館は、2015 年から 2019 年の 5 年間を通して、本と人との出会いや人と人との出会いの場としての「新しい図書館」を人々にアピールし、またイベントの告知や報告などの記事が多く掲載されている。しかし図書館側ではない人々、つまり図書館利用者や非来館者は、「本がたくさんあり、静かで集中できる場所」といったこれまでの図書館像を語る者がいることが分かった。

5.2 今後の課題

今回の研究から、次の 3 点の課題が導出される。

河北新報データベースからは、見出しに「図書館」を含む記事を抽出した。しかしこれでは、「図書室」と書かれた記事がもれてしまう。一般に「学校の図書室」と呼ばれる場所は、法律上は「学校図書館」と表現されるため、「図書室」を見出しに含む記事数は少ないと予想し、今回の調査では検索語としなかった。しかし今回抽出した記事は小規模図書館ほど記事数が少ない傾向にあった。学校図書館や専門図書館など比較的小規模の図書館を扱った記事をもれなく拾うためには、「図書館 OR 図書室」などの検索式の設定が必要であろう。

日本十進分類法による分類では、本来は図書館の理論や職員の養成は 010 に分類される。今回は先行研究との比較を行う目的もあったため、010 を分類の選択肢とせず、職員養成を 013 に収めるなどした。より詳細な分析を行うためには、今後追跡調査を行う際は 010 を分類の選択肢とし、さらに、数の多かった「015 図書館サービス、図書館活動」は「015.1 資料提供サービス：閲覧、貸出」、「015.2 情報提供サービス：レファレンスサービス [参考業務]」などの、より細かい分類を採用して調査設計を行う。

本調査で行った主題分析は、主観に基づく分類になる。また、河北新報データベースに含まれる記事は主に東北のニュースを扱うことから、東北地方の図書館の記事が多かったが、よく取り上げられる図書館とそうでない図書館があった。この差は、広報活動の違いとも換言できよう。今後は、記事全体、および館名ごとに内容分析を行い、その経年変化を見ることで、客観的かつ精緻な分析を行う。

今後これらの調査分析を行うことにより、図書館が立てている広報戦略やイメージ戦略と、その成果が明らかにできると考える。

参 考 文 献

- 1) 日本新聞協会. “新聞の発行部数と普及度 | 調査データ”. 日本新聞協会. <https://www.pressnet.or.jp/data/circulation/circulation05.php>, (参照 2020-10-27).
- 2) 日本新聞協会. “新聞の発行部数と世帯数の推移 | 調査データ”. 日本新聞協会. <https://www.pressnet.or.jp/data/circulation/circulation01.php>, (参照 2020-10-27).
- 3) 山口真也. 図書館員が考える「図書館員のイメージ」: 漫画作品に対するメディアイメージの分析. 沖縄県図書館協会誌. 2012, (16), p. 92-98.
- 4) 山口真也. 漫画作品にみる「図書館の自由」: 「利用者の秘密」を漏洩する図書館員. 沖縄国際大学日本語日本文学研究. 2002, 6(1), p. 31-60.
- 5) 山口真也. 漫画にみる図書館職員の人物像(1990年代以降). 沖縄国際大学日本語日本文学研究. 2001, 5(2), p. 1-33.
- 6) 山口真也. 漫画の中の学校図書館と「図書館の自由」: 「第3図書館は利用者の秘密を守る」との関係性を考えるために. 沖縄国際大学日本語日本文学研究. 2012, 17(1), p. 33-59.
- 7) 山口真也. 漫画にみる学校図書館と学校図書館職員のイメージ. 沖縄国際大学日本語日本文学研究. 2000, 5(1), p. 1-33.
- 8) 市村省二. 映像メディアの知的活用法を探る: 一「図書館・図書館員が登場する映画」を題材として. 図書館雑誌. 1992, 86(1), p. 33-35.
- 9) 仁上幸治. 特集, 図書館の発信情報は効果的に伝わっているか?: 学術情報リテラシー教育における広報イメージ戦略, 司書職の専門性をどう訴求するか. 情報の科学と技術. 2005, 55(7), p. 310-317. https://doi.org/10.18919/jkg.55.7_310, (参照 2020-10-28).
- 10) 佐藤毅彦. 2011年, 東日本大震災の年に, 図書館はどのように描かれたか: 映像メディアとコミック・文芸作品に登場した図書館・図書館員に関する事例研究. 甲南国文. 2012, (59), p. 200-180.
- 11) 佐藤毅彦. 図書館法改正と「メディアの中の図書館のイメージ」法改正の年に文学作品に描かれた図書館は? 事例研究「レファレンス・カウンターの難問」を中心に: 図書館はどうみられてきたか; 10. 甲南女子大学研究紀要. 文学・文化編 =Studies in Literature and Culture. 2009, (45), p. 1-13.
- 12) 長谷川幸代. 公共図書館のイメージについての調査研究: 一図書館と書店のイメージ比較一. 情報メディア研究. 2014, 12(1), p. 52-61. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jims/12/1/12_52/_pdf/-char/ja, (参照 2020-10-27).
- 13) 村井恵. 図書館に関する新聞記事のクリッピングとその分析. 中京大学図書館学紀要 =Chukyo University bulletin of the library science. 1987, (8), p. 72-80.
- 14) 林麗娜. 図書館に関する新聞記事の内容調査. 筑波大学, 2013, 57, 1, 12p. 修士論文. 入手先, つくばリポジトリ. https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=33011, (参照 2020-10-28).
- 15) 小田孝子. 新聞記事による 1990年代以降の九州地区図書館サービスの傾向. 図書館学. 2013, (102), p. 1-8.
- 16) 林は朝日新聞社の新聞記事データベース「聞蔵Ⅱ」を使用して『朝日新聞』を収集していた。本研究も「聞蔵Ⅱ」を使用すると, 林の研究結果と時代の比較ができると考えた。しかし, このデータベースは東北地方で発行された新聞に掲載された記事にしばって検索することができないため, 調査対象から外した。
- 17) 3.2.1 の館種の分類「外国」と重複する。
- 18) 『日本十進分類法』では, 011 と 013, 015 では「ここには, 図書館〈一般〉および公共図書館に関するものを収める; 公共図書館以外の各館種に関するものは, 016/018 に収める」と説明されている。つまり, 本来は 011, 013, 015 には学校図書館や専門図書館などの公共図書館以外

の館種は分類されない。同様に 016 には「公共図書館〈一般〉に関しては、政策・行財政を 011 に、建築・設備は一卷ごと館ごとの建築誌を除いて 012 に、経営・管理を 013 に、図書館サービスおよび活動を 015 に収める」と注記されている。本研究では 011, 012, 013, 014, 015, 019 の分類と 016, 017, 018 の分類を分けたため、本来 012 などに分類され 016 には分類されない内容の記事であっても、016 に分類した。

- 19) 『日本十進分類法』新訂 10 版は 2014 年 12 月発行である。
- 20) もりきよし原編. 日本十進分類法. 新訂 10 版, 日本図書館協会, 2014, 2 冊.
- 21) 林は「村井の研究で記事は『図書館に関する情報を網羅的に集まる (原文ママ)』だが、主観的に有益な情報を集めることが考えられる」としている。